連載
留萌ダム
○環境影響評価編○

動植物に影響がないダム工事を

留萌ダムの建設事業が今年度から国の直轄事業として行われています。これからの本格的な事業の着手を前に、必要な手続きの一つとして、現在、「環境影響評価」を実施しています。今月は、ダムが建設される幌糠町のチバベリ川周辺の自然環境とダム建設の影響などについてわかりやすく紹介したいと思います。

ムカシトンボ

「留萌ダム環境影響評価」は留萌ダムの建設が自然環境の保全や公害の防止に対して影響がないかどうか評価し、必要がある場合は保全対策の措置をとるものです。

ダム建設事業についての「環境影響評価」はダム貯水池の湛水面積が200㌶以上の場合に義務づけられており、留萌ダムの湛水面積は約220㌶となることから「建設省所管事業に係る環境影響評価実施要綱」および「北海道環境影響評価条例」に基づき、所定の手続きを行っているものです。

具体的な手続きは、北海道開発局でとりまとめた留萌ダム環境影響評価書について、北海道知事や留萌市長の意見を聞くもので、現在、留萌開発建設部、留萌市役所などにおいて、市民に同評価書が縦覧されているところです。

生きた化石
ムカシトンボ

昭和59年9月から62年3月までの間に、留萌ダム流域内の川底に生息する底生動物の調査を行ったところ、チバベリ右川の奥で自然環境保全調査（環境庁）の対象に選定された指標昆虫の「ムカシトンボ」の幼虫が発見されました。

このトンボは、蜻蛉目（トンボ目）、ムカシトンボ科に属する昆虫で、幼虫は山間部の清らかな渓流、特に両岸から樹木が覆いかぶさるような小河川に生育しています。

幼虫期間は、他のトンボと比較して長く7～8年と言われています。成虫は、体長40～50㎜程度で、左右の複眼が乳白色をして近づいています。前後の羽根が同じ形をしているなどの特徴があります。このような種類は現在、ヒマラヤ山麓に生息するヒマラヤムカシトンボと本種だけが知られていると言われています。

この種は、約一億五千年前に生息したトンボの姿（化石として発見されたもの）を、そのままに近い形でとどめているので、「生きた化石」として有名で、日本昆虫学会の会章になっています。

このように留萌ダムの上流部は、清流を好む昆虫が生息している良い水環境であると思われますが、留萌ダムが完成した場合でも、ムカシトンボの幼虫の確認位置は湛水区域外であり、生息環境は現状どおり維持されることでしょう。

天然記念物
（国指定）
クマゲラ

昭和59年10月から62年10月までの間に、湛水区域及びその周辺に生息する鳥類の調査が行われ、春にはアオジ・ホオジロ・ムクドリ・キセキレイなど、秋にはツグミ・カシラダカ・アオジなど、全体で25科64種の生息が確認されました。

特に、確認種の中には、国指定の天然記念物であるクマゲラが含まれていました。

このクマゲラは、全身が黒色のキツツキで、雄は頭上から後頭にかけ鮮紅色ですが、雌は後頭にわずか鮮紅色があります。この鳥は山地の巨木の多い森林に生息し、キョッ、キョッと鋭い声でなき、また、嘴（くちばし）で樹幹をたたくコロ、コロと聞こえる音は遠方までひびきます。

クマゲラの確認位置は、湛水区域から相当程度はなれていて、生息環境は現状どおり維持されることでしょう。

クマゲラの雄と雌

新潟県等では
食用にされる
イトヨ

昭和60年から62年までの間に、チバベリ川・留萌川・タルマップ川・中幌糠川の18地点に網を入れて川に生息する魚類の調査を行ったところ、チバベリ川ではエゾウグイ・ハナカジカ・サクラマスなど、留萌川の上中流部ではフクドジョウ・ギンブナなど、下流部ではワカサギ・マルタ・ウキゴリ・イトヨなど調査区域全体で16科22種の生息が確認されました。

特に、留萌川下流部で確認されたイトヨは自然環境保全調査（環境庁）の対象に選定されていて、溯河型と陸封型とがあります。溯河型は日本海岸では釜山及び島根県浜田以北・大平洋岸では利根川以北、陸封型は福井、栃木県などで見られ、水の清い小川にすみ、春の産卵期には雄は水草で丸い巣をつくり、雄の頬は紅色を呈します。溯河性のものでは稚魚は海に下って成長し、翌春産卵のために川に上ります。

イトヨの確認位置は留萌川下流で、ダムが建設されても河川維持流量が確保されることにより生息環境には影響がなく現状どおり維持されることでしょう。

イトヨ

エゾサンショウウオ
オナガアゲハなど
も確認

これらの動物の他にも、小型哺乳類・哺乳類・両生類・は虫類・昆虫類について調査を実施したほか、植物では陸上植物・水生植物などの環境調査を行いました。その結果、両生類のエゾサンショウウオ、陸上昆虫類のヒメウスバシロチョウ・オナガアゲハ・カバイロシジミ・オオルリオサムシ、植物のマルバキンレイカなど自然環境保全調査（環境庁）の対象に選定された種が確認されました。これらは、生息域の一部が消失または生息環境として適さなくなる可能性がありますが、湛水区域外にも広く分布していることから生息環境をいちじるしく害さないと考えられます。

このように留萌ダムが建設されるチバベリ川周辺には、豊富な種類の動植物が確認されました。今後のダム本体、付替道路及び原石採取などの工事の実施にあたって地形の改変は極力少なくされます。

また、工事の実施に伴って発生する裸地には、必要に応じ適切な緑化対策がとられます。なお、予測し得なかった環境への著しい影響が工事中やダム完成後にみられた場合は、必要に応じて調査が実施され適切に措置をされることとなります。